2023年
二葉幼稚園　園のたより　7月

7月の聖句

しゅよ　あさごとに
わたしのこえを　きいてください

詩編5:4

7月のさんびか

キリストのへいわ

こどもさんびか改訂版　46

心ひらかれて

6月は盛りだくさんの行事がありました。その一つ、人形劇団クラルテ観劇では見事な舞台装置に、見たことがないような楽器の数々、研鑽を積んだ団員による「もりのちいくまちゃん」(約20分:対象/年少親子)「わくわくどっきんこぶたのりんご」(約30分:対象/年中長親子)に子ども達も魂を吸い取られたように、人形劇の世界にすっかり魅了されていました。後方から見ていると、子ども達の背中、姿勢から、こころいっぱい身体いっぱい、どれほど集中して聴き入っているのかがわかりました。楽しい場面ではどっと笑い、言葉なくとも顔を見合わせ、思いが通じ合う瞬間･･･。

このクラルテという劇団名は、フランス語でおひさまのこと。コロナ禍で制限を強いられた子ども達やご家族に、せめて園で一緒に楽しめる良質の喜びを！と願い、クラルテをお招きして数年。毎年ながら内容は勿論のこと、舞台装置や人形一体一体が素晴らしく、それらも全部団員の方々の手作りとのこと。観劇後、クラルテの方々と思わず話が弾みました。

何と創設は75年前！しかも男子高校生5人が！子ども達を喜ばせたい一心で人形劇を始めたそうです。昭和23年と言えば、どんな時代だったのでしょう？社会科の教師だった前理事長に尋ねてみました。「戦後の物のない時代。戦災孤児も多く、衣食住はじめ、校舎、教師全てが不足していた時代。子ども達の娯楽なんて何もない時代だった。だからこそ、新しい何かを生み出そうとしていた時代でもあった。」と。当時のメンバーは現在いらっしゃらないそうですが、その思いは大切に受け継がれていることや劇団の経緯を今回初めてお聞きしました。高校生の熱い思いから生まれたクラルテ･･･。ふたば会にもお伝えすると、皆さん感慨深げに「鳥肌がたちました！」と、またそこで共感。この感動を皆様にもお届けしたくて、クラルテさんに園便りへの掲載確認をすると、クラルテさんも「思いを受け取って下さったことに"じ～ん"としました。」と仰っていました。

先日、「セロ弾きのゴーシュ」(宮沢賢治/文　茂田井武/絵　福音館書店)について学ぶ機会がありました。楽団でセロ(チェロ)を担当するゴーシュはいつも指揮者から注意され、自信を失くしていました。もどかしさと向き合いながら、夜な夜な一人で練習をするゴーシュ。宮沢賢治の言葉、文章が美しく、赤裸々な人間の弱さの描写が心のひだに染み込んできました。自己の存在価値に悩み、傷つき、葛藤を抱えながら、もがき苦しみつつ懸命に努力する姿。それを見守り包み込む、自然や動物たちとの関わり･･･。弱さを抱えるゴーシュが奏でるからこそ、彼の素直な思いが音に表れ、他でもないその音色が彼の気づかぬところで自然と周囲を癒していたのです。無心に、唯ひたむきに向き合うことで、やがて超えられる「何か」がある。

この表紙の緑っぽい絵が特に好きだったわけではないのに、幼少期に一度見てから不思議と脳裏に焼き付いていました。福音館の編集者松居直氏は宮沢賢治のこの作品を描けるのは、茂田井武氏しかいないと切望、懇願。当時、病床にあった茂田井氏の妻が断るも、「たとえ命が縮んだとしても「描きたい」と願い、画家茂田井氏が取り組んだ最後の作品だったと知りました。

クラルテ、ゴーシュ、芸術や文化、子育て、保育、子ども達のこころ･･･etc。思いは想像を超え、人々の胸を強く打つのです。子ども達も私達も、朝ごとに祈り新たに、心ひらかれて、様々な人や物や自然と触れ合い、熱い思いを胸にともにつむぎあい、生きていきたいものです。【園長】